

軍 事 史 学

第 60 卷 第 3 号

卷 頭 言

米国にある膨大な資料を忘れた軍事史の将来を憂える

田中宏巳

戦後八〇年近くなり、敗戦の影響を受け続ける分野は少なくなつたが、まだ受けている一つが近代軍事史の研究である。無条件降伏の中には、敗戦国の様々な資料を根こそぎ戦勝国が持ち去ることができるといふ文字化しない項目があつたのかもしれない。接収に当たつた米機関は幾つかあつたが、その中で最大であつたのが WDC (Washington Document Center) で、一九四五年から四六年にかけてドイツ、ついで日本で接収作戦を行い、日本からは概ね四五万点 (item) にのぼる軍事関係の記録や印刷物を接収し、七千トンを超える輸送船に一杯になるまで積み込んで米国へと運んだ。

米国では、一部分が朝鮮戦争のために利用されただけで、大多数は何のあてもなく倉庫にほうり込まれたままだったから、数年後に日本側から所蔵目録に基づく返還を求められると、快く二万五千点の返還に応じている。だがこれ以降、残りの返還を求める動きは一度も起きなかつた。再び WDC 接収資料の調査が行われたのは、四〇年以上過ぎた一九九〇年からで、保管者になつていた米国議会図書館の広大な書庫の隅々に押し込まれていた中から探し出せたのは六万二千点ほどに過ぎず、残り三万七千点は未だに行方知らずである。WDC 以外の機関が米国に持ち込んだ資料も含めると、現在、日本国内で利用できる資料よりずっと多いことは間違いない。

戦後、多数の重要資料が米国に行つたままの状態で、軍事史の研究が積み上げられてきた。米国にある資料を見ずともできるテーマもあるが、日本にはないが米国にあることが明らかにになっているにもかかわらず、国内で利用できる資料だけでまとめられている研究は少なくない。厳しいことをいうようだが、軍事史を手掛ける者は、敗戦によつて資料の過半が米国に持ち出されたままになっている現実を忘れずに、歴史の真実に少しでも近づく努力を続けてほしいものである。

(防衛大学校名譽教授)